

想隨畔橋



50年ぶりの快挙

後藤哲也
(44商)

『50年ぶりに一橋勢が制す 矢部が自己ベスト63m88』これは陸上競技部の矢部尚史選手(法3)が関東インカレ2部やり投で優勝したことを伝える『月刊陸上競技』7月号の写真入り特

集記事の見出しである。

ちょうど50年前の1966

年(昭和41年)の優勝者は、

五種競技との2冠を制した松

本正義氏(如水会前理事長、

現住友電工社長、大阪陸上競

技協会会長)である。水戸一

高で八種競技をしていた矢部

選手は、インカレ後、茨城大会で松本

OBの旧規格・学内記録66m00を超え

る新旧両規格(注1)を通しての学内新

記録、69m59を達成した。

関東インカレのやり投種目での一橋



矢部尚史選手(2016年)



東大戦優勝時の松本選手。左上に投てき後の槍が見える。(1966年、東大駒場グラウンドにて)

勢の優勝者は、歴史を紐解いてみると両選手以前に4名存在している。戦前に外川武氏(11学・2回優勝)、木原正義氏(15学)、宮崎武雄氏(16門)。戦後では天明良介氏(26学)。木原選手は跳躍種目も含め4種目計5回優勝し「商大の鉄人」の異名をもつ。選手層が薄く掛け持ちせざるを得ない事情もあるが、昔は異種目に幅広く挑戦している。

やり投以外の戦後の関東インカレでの優勝は、前述の天明氏が優勝した昭

和22年に岩田正雄氏(23学)が200m、110mハードル、400mハードルで、並木俊守氏(24学)がハンマー投げで優勝し、2部総合優勝も遂げ1部昇格。その後は昭和33年に円盤投げで松永宣夫氏(34経)、昭和47年に三段跳で田島泰次氏(50法・ベルリンオリンピックの三段跳で世界新記録で優勝した田島直人氏の子息)、昭和58年に三段跳で内田哲也氏(59商)、平成元年に1600mリレーで設楽良昌(平2社)、岡浩(平2経)、中村正宏(平4経)、長谷川聡(平5商)のメンバーで優勝している(今も学内記録)。従って、今回の矢部選手の優勝はやり投では昭和41年の松本氏以来だが、全体でも27年ぶりの関東インカレ優勝となった。

学生部員の最近の活躍の背景にはグラウンド改修効果がある。近年の競技

会は全天候型タータン競技場で実施されるが、母校のグラウンドは土のまま。タータンと土では脚への反撥が大きく違い、タータンで練習しないと競技会では勝てない。そこで、OB会前会長の青木俊樹氏(42商)が中心になり、グラウンド改修の募金活動を実施しOB・OGの寄附金を基に2年前にタータングラウンドが完成した(注2)。

その成果はまず短距離陣に顕著に表れ、100m学内記録の更新が続き、今年の東京地区国公立戦は100m、400mリレー、やり投で優勝。先輩達も寄附した甲斐があったと言える。永年悲願のタータングラウンドは陸上競技部の宝物であり大切にして欲しいが、部外者により鋭利な物でタータントラックが傷付けられるケースが複数回発生し、土のグラウンドはならせば済むが、タータンは高額補修が必要

であり対策に苦慮している。

グラウンド改修は「一橋大学基金」への寄附で実施されたが、「一橋大学後援会」寄附制度(金額自由)を活用するOBも増えつつある。欧米の大学のように卒業生による草の根の寄附文化が一橋大学陸上競技部に定着し、恩恵を受けた学生達が卒業後、お返しに後輩支援をするという好循環が理想型、というのは性善説過ぎるか。

長距離種目OBの私としては、一橋選手の箱根駅伝本戦出場を念じつつ応援していきたい。

注1 1986年の規格改正で飛び過ぎ危険防止上、やりの重心位置を4cm先端方向に移動させ、落下地点を従来よりも手前に変更。

注2 詳細はネット検索…一橋大学陸上競技部→OB OGのページ→グラウンド改修

(一橋陸上競技倶楽部)

監事兼如水会々報担当委員)